エゾマツ

第８号
発行 北海道ボランティア・レンジャー協議会
1989、1. 31
発行責任者 河村千束

特集　三期　新会員の声

主な内容

○ 正月に思う・・・・・・・・・・・会長　河村　千束
○ 昭和６３年事業を省みて・・・・副会長　大友　健
○ 新役員紹介
○ 年間行事計画
○ 行事のご案内
○ 特集　３期新会員の声
○ スズメバチはなぜ刺すか・・・・・・・・・山上光一
○ 手稲山研修登山・・・・・・玉田紀美子

正月に思う

会長　河村　千束

1989年が静かに平和のうちに明けました。1988年は会員をはじめ多くの大々の御支援を賜り心からお礼を申し上げます。

当会も４年目を迎えより一層多くの人々の声に耳を傾け更に豊かな郷土北海道の自然と人間の架け橋になるよう努力して参りたいと思っています。

さて、年が新しくなるだけで心身がすがすがしくなるのは何故だろうか。時の流れは連綿と続くなかで正月は必ず巡ってきて時流に節目をつける。そして、惰性に流れ勝の私たちの生活に，心に、新鮮なものを与えつつ流れ続ける。心機一転という言葉がまさに正月に相応しい言葉であると私は思っている。

日の出前に神社に参拝し、若水で口をそそぎ、拝殿に頭ずき、新しい心と新しい目で自然に接したとき、身の引き締まるのを覚える。いつもの見慣れた山も森も小川も統べて森厳にみえてくるのである。新しい決意と未来に向かっての願いを祈るのも正月であり希望に向かっての出発点でもある。その出発点に立って1989年を如何に活動するかが会の隆盛に係わつてくるものと思います。種々問題点もあると思いますが、お互いに考え、理解し、情報を交換し着実に一歩一歩進むことにより始めて私たちの会の目的が達せられるのではなかろうか。そのためには常に「はり」のある活動をしたい。それには常に自然に接し、自然を愛し、尊ぶことが大切ではなかろうか。

最近動物たちの種の保存のための行動がテレビを通して話題になっている。動物たちの行動は、私たちに崇高さを与えてくれる。しかし、動物は自分に関係のないものには極めて「冷酷」で「思いやり」が全くない。このてんが人間と異なるところである。しかし、近頃は人間の中にも全く「思いやり」のない人が見受けられるのは、誠に残念なことである。今こそ「思いやり」の人間教育をする時期であると思う。「思いやり」の心こそ自然保護の原点と思う。

又、今年は地球規模の環境破壊に対して、世界をあげて取り組む国際協力元年ともいわれている。炭酸ガス・フロンガス・森林破壊等その対策は世界が一つになって始めて達成出来ることである。私たちは私たちなりに自分の周辺の小さな事から環境保全活動を始めるときが巡ってきたと私は思っている。　このようなことごとを思いながら正月を迎えました。

今年も又、多くの人々と共に自然の中で面白い遊びと楽しい自然観察を繰り拡げていくことをお願いして新年の御挨拶と致します。

昭和６３年の事業あれこれを省みて

副会長　大友　　健

私達の６３年事業の柱は、野幌森林公園の四季の観察会であり、そこにいろいろな問題を見出しながらも、参加会員は、参加することによる資質の向上をみたことは確かである。野幌森林公園は、私達のフィールドとして参加会員の大半の方が、地形や自然条件的なことを熟知している所であり、一般参加者の方々と共に、楽しく自然観察ができたことは喜ばしい事であります。
公園事務所においても、私たちの今後の活動に期待を寄せているようである。

第２は、標茶町における第３回ボランテイア・レンジャー育成研修会に併せた総会と湿原巡りの研修会であった。

案内をいただいた標茶町郷土館長豊原先生は先住民族の郷土史的にまた根釧地方の特異気象の中での植生分布にふれながら説明をいただいたことは、根釧湿原の雄大さを一層感じさせ湿原に棲息する数多くの動物を含め何かしら神秘性を抱かせたのである。塘路湖畔の郷土館より出発したバスは、釧路市湿原展望台を経て鶴居村雪裡、そしてコッタロ第１・第２展望地で、湿原に沈む夕日に大きな感動を抱かざるを得なかったのである。どうかあの26.861ヘクタールの釧路湿原国立公園が何時までも国立公園指定時の姿で自然の営みがあるようにと祈るものである。

湿原巡りの感動を胸に夕食後開かれた「エゾマツ会」総会では既報で報告したように会の組織を三部制とし、名称も「北海道ボランティア・レンジャー協議会」と改め今後の発展を共に誓いあった。

その他として９月に岩見沢利根別自然休養林観察会を支庁・岩見沢市の共催としてほしい旨の申し入れを受け、レンジャーとして活躍しながらも参加者と共に「タマゴタケ」の色彩のみごとさに歓声をあげ、帰りには支庁側より若干の謝礼までいただいたのである。同じ９月末の手稲山登山では、河村会長がリーダーを勤め健脚を披露した。

１０月には、協議会として発足後の大きな行事となった北大　植物園での会員研修、と翌日の野幌森林公園での秋季観察会参加者の観察指導にあたったのである。

この行事の執行にあっては事前下見・資料作成など会員の協力が実を結び盛会を期し、今後の観察会にむけて力強い自信となった。森林公園事務所側からも、高い評価をいただき年内行事を締めたようで肩の荷が降りた感じになったのは小生１人のみであったろうか。

前後したが吉野幹事の奮闘により実施した旭川北邦野草園行きは、道央圏の会員との交流と建設中の嵐山ビジター・センターを訪れることができたのは特筆すべきであろう。同じく吉野幹事の御苦労によるバス利用により実現した雨竜沼湿原探勝では前の保全係長や、空知支庁自然保護係の方のご参加もあり（これが秋の岩見沢利根別への糸口にも）夜の会食もなごやかに、心を開いての談笑は忘れ難いものがあり、又の企画を望む声が大きいようである。

初冬の１１月には、山上幹事の御苦労、御指導により冬期鳥類観察には絶好の巣箱・給餌台作りにいそしんだのである。

思うままに過ぎた１年を省みたが、今後の協議会の歩みについて皆んなで検討し、楽しい協議会作りにつとめたいものである。

新役員と事務分掌

会長　河村　千東　　副会長　大友　健　　高橋　美智子

総務部　○　野月　筆雄　　小竹　数博　　八戸　克美　　杉田　範男
　　鈴木　広司

研修部　○　村上　紀道　　吉野　明彦　　松田　満　　五十嵐　博
　　佐藤　均

広報部　○　小山　賢一郎　　山上　光一　　加藤　清春　　玉田　紀美子
　　千葉　教子　　三谷　幸美
　　高橋　雅子　　鈴木芳男

監　査　　大杉　三郎　　住吉　光子

○印は部長　　太字は三期生からの新役員です。よろしくお願い致します。

年間行事計画表

1989. 1.

月	行事計画
1	
2	2/26(日)冬の森林観察会 (野幌森林公園)
3	
4	4/23(日) ゴミ拾い活動 (野幌森林公園) 会報9号
5	5/21(日) 春の森林観察会 (野幌森林公園)
6	6/11(日) 環境週間恒例観察会 (野幌森林公園を予定) 会報10号
7	総会 (札幌圏を予定)
8	8/20(日) 夏の森林観察会 (野幌森林公園)
9	岩見沢利根別自然休養林観察会 会報11号
10	10/21～10/22 会の研修会と 秋の森林観察会 (野幌森林公園)
11	(巣箱作り)
12	12/2(土) 反省会
備考	1990. 2. 25(日) 冬の森林観察会

○ 野幌森林公園では、例年通り四季の観察会のない月は、第2木曜日に定例観察会を行います。

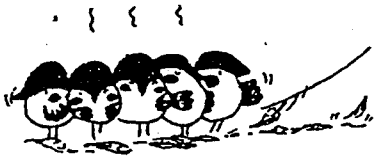
○ 5月以降の、詳しい日程については、次号以降の会報を御覧ください。

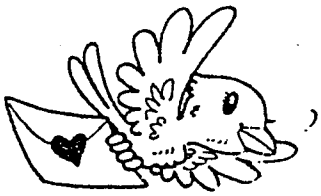
お知らせ

○ 今年度の行事計画は、会としては、かなり絞りこんだものとなっておりますが、先般の役員会において、会員の皆様の御意見や要望等を取り入れ、昨年の北邦野草園や雨竜沼1泊研修のようなものも是非実施したい旨、話し合いが行われています。

広報部長、小山までお早目にお便りをお寄せください。お待ち致しております。

○ その他、関係機関等の行事計画については資料が集まり次第お知らせ致します。





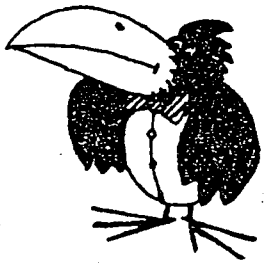
行事案内

冬の森林観察会

２月２６日（日）野幌森林公園において冬の森林観察会が行われます。
北海道に住む私どもは、冬をこそもっと楽しむようにしたいものです。
雪の状態にもよりますが、公園事務所では歩くスキーを利用したい意向です。

○ 集　合　　野幌森林公園　開拓記念館前
○ 日　時　　２月２６日（日）　　１０時

出席される方は２月２０日まで、高橋　電話　0133-74-2058までご連絡ください。
下見については、天候状況をみて２２日～２４日に行う予定です。ご都合のつく方はご出席ください。



ゴミ拾い（野幌森林公園）

昨年に続き、会がもっとも多く利用させて戴くフィールドを美しくということで、今年も下記の要領で、ゴミ拾いと会員研修を合せ行います。ご多忙とは存じますが会員多数のご参加をお待ち致しております。

記

1　日　　時　　４月２３日　　１０時　～　１５時
2　集合場所　　野幌森林公園　大沢口
3　持　　物　　弁当　軍手　など

※　参加申込及び詳細については　村上　電話　011-681-3952　までお尋ねください。

新会員の声

標茶町　佐々木　幹彦

皆様はじめまして。
この度、新しく会員にならせていただきました。よろしくお願い致します。

昨年７月下旬に釧路管内標茶町茅沼で行われた第３回ボランティア・レンジャー育成研修会に参加し五十余名の方々と楽しく受講させていたたきました。３日間にわたる研修は大変楽しく又、意義深いものでした。

又、講義終了後同室の方々との交流は特に楽しく、最終日の野外実習もあいにくの悪天候にもかかわらず大変楽しく勉強させていただだました。

私は今まで主に山歩きを通して野外活動をしてきましたが、どちらかというと個人的な楽しみにとどまり、ただ黙々と登り周囲の景色などにも目を向けず降りてくるというスタイルの山歩きでした。

ところが段々年をとり体力がおちてくると必然的に休憩ピッチが早くなり腰をおろす時間が多くなつて周囲を見回すということが多くなり、樹木や草花などがいやでも目に入るようになりました。

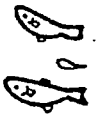
シャクナゲ・ツツジ・コマクサ・ガンコウランｅｔｃ・・・・・。

全く見事な眺めです。それと同時に休憩場・水場でのゴミの多さが目につき始めました。

せっかく見事な風景に見入っていてふと足元を見るとジュースの空カン・スナック類の袋・煙草の吸殻などなど。私たち日本人の悪い習性で自分の身の回りはきれいにするが一旦よそへ行くと平気でゴミを捨てるのです。自分一人の山や自然ではなく皆んなのものなのです。私達の子孫に美しい自然を残しましょう。

最後になりましたが羅臼岳から知床硫黄山への１泊２日の縦走は本当に楽しい山行きです。何度行っても飽きることはありません。

皆さんにぜひお奨めします。



札幌市　千葉　教子

私は昨年の夏利尻へ行きました。私は利尻で生まれましたが、島を離れるまでの記憶が幼かったために全くなく、ぜひ一度行ってみたいと思っていたからです。利尻の山の緑の深さと海の青さが印象的でした。町から３０分と歩かないうちにうっそうとした森があり、氷河期の生き残りという黒いチョウが飛んでいました。札幌では見ることのできない植物もありました。私は利尻の自然の美しさを忘れることができません。

しかし自然が残されている一方では、人々の生活によって確実に自然が使われ、壊され汚されているのではないでしょうか。先日ＮＨＫの番組で毎日何万トンという産業廃棄物を海に流しているのを知りました。原子力発電の事故による汚染も心配されています。人間が生きるためには仕方のないことかもしれませんが、自然を守り、残し、改良することも行わなければ、私達の子孫に伝えていく自然の美しさや尊さは何も残らなくなってしまうでしょう。

私は、昨年ボランティア・レンジャー育成講習会に参加しました。参加の動機は、なぜ自然保護を必要とするのか具体的に考えられるようになりたいという気持ちからでした。実際に釧路湿原のシラルトロ湖や湿原を見て歩くなかで原始の姿の湿原に観光のための工事が行われるかもしれないということを知り保護されている鳥達を見ました。タンチョウの数が保護によって増えていることも知りました。

自然保護とは、自然そのままの姿、本来の姿を知ることから始まるのではないでしょうか。ここには昔こんな花が咲き、こんな鳥がいたが、もうその花はなく鳥もいなくなったということが決してあってはならないと思います。私はこの会の研修会、自然観察の場を通して、変わっていくもの、失われたものは何かを捜しみなさんといっしょに残す努力をしてゆけたらと思います。

三つ星の頃

旭川市　沖舘　紀子

今年もオリオンの三つ星が昇ってきました。もう１５～１６年も昔のことになりますが、１１月の末苫小牧で長男夫婦と暮らしていた祖父が亡くなりました。その通夜の晩、つめたい風に震えながら星をながめていました。星座を覚えたてだったせいでしょうか、しばらくすると行儀よくならぶ、同じ明るさの三つの星・・・すぐにオリオンの三つ星だとわかりました。

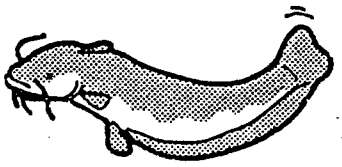
そして、昨年の１１月末、今度は祖母が亡くなりました。苫小牧は同じようにつめたい風でした。この夜星が見えていたのかどうかは知りません。

翌日、一人で苫小牧のプラネタリウム（科学センター）へ行きました。たった一人の観客のために、職員の方は三つ星を中心にオリオン座の説明をしてくださいました。暗闇の中で涙が出そうになりました。

実は尊敬する野尻抱影先生の文章に『三つ星の頃』という作品があります。北斗七星とカシオペヤしか知らなかった私に星の世界を広げてくださったのが先生の星の本です。

先生が作家大仏次郎氏の兄上であり、また、太陽系第９惑星、冥王星の命名者だということを知ったのは、やはり先生が亡くなられた頃だったと思います。

その冥王星が、今年　地球に近づきます。もちろん、発見されてから始めてのことです・・・・・・。



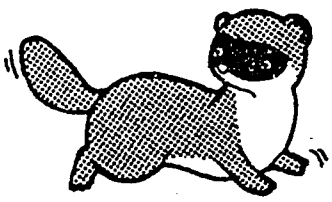
留萌市　祐川　　弘

今回協議会に加えてもらいましいた。中学校で特殊教育を担当する一教諭です。私と植物の係わりは、学校では技術科の栽培、園芸クラブの顧問、特学実習で育苗からの花壇造り等です。学校外では私的にも植物が嫌いではなかった。勤務地が比較的田舎で耕地の活用が容易であったことなどから、土や自然に親しむ機会に恵まれ野菜作りや花木栽培を体験できました。

勤務地が南北に長い日本海側の留萌支庁で、南・中・北部を移り住み各地域特有の植生にふれることができ、自分なりに満足感を持っています。３０年前に天塩の山奥に住んでいた通称仙人といわれた方からもらった割箸ほどのオンコを今でも家族の一員として連れ歩き、片手では持ちあげられぬ程の成長ぶりです。何事にも下手の横好きで素人の域を出れずに種々と体験しましたが、近年は場所をとらずに育てやすく、人工の手が入らず、値段もまあまあなのが魅力で山野草にひかれ若干育成中です。昨年夏の研修会では私など未知の角度からの自然に対するとりくみ方や、自然保護思想の重要性などの指導を賜り認識を新らたに帰宅した次第です。又、早朝に指導いただいたバードウオッチングもすばらしい企画で感銘深いものでした。同じ眼でも見える眼と見えない眼のあることを知ったり、鳥の居場所を予測する技術など感心しているうちに予定の時間が過ぎたようでした。

以来今までは山野を散歩しても無関心であった鳥の声や物音に思わず眼がそそがれます。植物の採集などでは指定地外では案外と無造作に採集していましたので赤面をする場面が多々ありました。今後は研修会で得られた事柄を肝に銘じ野外観察を実戦します。講師先生・企画の関係者の方々・先輩研修会員の皆様には大変お世話になりありがとうございました。

今後も会を通じいろいろお世話になります。足手まといにならぬようがんばりますのでよろしくお願い致します。



釧路市　　林　　勝夫

この度皆様の会に入会させて頂ました.釧路市武佐２丁目に住んでいます林です.
私は今迄で自然が少なくなるのを見るとなんとなく淋しい気持ちと不安な気持ちです。少しでも多くの自然を残して頂だきたいと願う此の頃です。そのためには、何か私に出来ることがあればお手伝いしたいと思っておりました。
その頃、新聞でボランティア・レンジャー研修会のある事を知り申し込み参加させて頂ました。
その研修会で会員の方々が種々野外にて御指導して下さいました。会員の皆様の勉強なされているのに頭が下がります。私もこれから皆様と共に勉強させて頂だきたいと思います。

釧路市　　佐々木　文雄

こんな私です。

私は、樺太敷香郡内路村字内川という所で生まれ、12歳まで住んでおりました.
そこは、川の流れに沿って農家が点在する典型的な開拓部落でありました。(因に、私の家からは西隣の家が見えませんでした) 家のすぐ近くを流れている川は、上流域にあたり川幅も４～５ｍと狭く、その流れはあくまで清く、住む魚はイワナでした。背後には山が迫り、終戦間際には松根油を取った松が密生しておりました。
そんな所ですから勿論、電気・ガス・水道等というものはなく、ランプ・薪ストーブ・川の水（後になってポンプ）を使うという生活でありました。
数え年７つで小学校に入りましたが、片道約１０Ｋｍの道のりを歩いて(冬はスキーで) 通いました。特に復路は、春はカエルやイモリの卵を採ったり、秋は小さな池の周りを飛ぶトンボを柳の枝を折ったもので叩き落としたりして、道草を食ったものです。
私の家も無論農家でしたが、なにせ緯度が高く(北緯50度線から90Kmほど南の地)そのために冬は早く、春が遅いという土地柄だけに、ジャガイモ・ビート・燕麦・小麦そして自家用の野菜を作るのが精一杯でありました。ですから、農業だけで生計を維持することは難しく、父は馬を飼って畑仕事の合間に運搬業をして、その足しにしていました。畑仕事も、馬を利用する以外は全く家族労働に頼るしかありませんから、小学生の私も大いに当てにされ、繁忙期には学校を休ませられることが多かったものです。(学校が好きでなかった私にとっては、それが少しも苦になりませんでしたが・・・)とりまく環境がこんな様子でしたから、殊更「自然」を意識したことはありませんでした。それが、近年になって唱歌「ふるさと」にもあるように「故郷の山や川」強いては自然が懐しく想えてならないのです。年のせいでしょうか・・・・。こんなことが、自然を学ぼう、そして自然に教えられようという動機の一端になったことは否めないように思います。
ともあれ、自然を愛するみなさんの仲間に加えていただいたことに感謝し、今後のご指導をお願いし結びといたします.

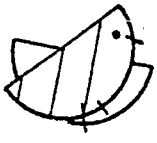
北見市　　小野　勝弘

私は宮城県より、網走支庁管内に移り住んで１３年になる。趣味といえば、四季を通しての五目猟である。猟とは、とんでもない！とお叱りを受けそうですが、事実です。四季の風景をフイルムに盗み撮るのですから、ひょっとして自然を盗む最大の盗人と自負しているのである。
さて、１０年一昔という区切りについて、先人達は実に見据えていると思う。来道当時は、見通しの悪い川辺り、薄暗い山の中、沢山の溜池、そして四季折々の山菜魚を頂戴しておった。自然の恵み

を頂戴するのは物心ついた時よりずうっと続いているのである。父も祖父も自然の中での付き合い方を教えてくれたのである。山を汚(ケガ)せば山の神から天罰が降(クダ)ると言われ、山の草木、水、魚等頂戴する時は、各々の神様に分けて頂く様に乞うのである。先人達が自然の中で作り上げてきた自然を大切にすべき為の知恵なのである。知恵という言葉は恵みを知っていると書く。これこそ現代の物質文化を一笑し警告する一言だと思えるのです。先人達が自然と共存してはぐぐんだ思想であり西洋的な抵抗思想が見えないのである。　子供の頃より自然の中で暮して、自然が当然だったので近頃の山を見れば、外国種の草原と化し、一つの樹種丈が植林してある。川を見れば見通しが良くなり草木は刈払ってあり、川底の石さえ見えずに人口の鎧をまとってしまっている。水鳥、魚等の屋根付の寝屋はとりはらわれている。実に情けないのである。さぞかし鎧の下では苦しんでいることであろう。そんな時、子供の頃の体験をもう一度と思うが、親たる自然を尊敬し、自分が自然の中では一員でもなく、しかも対当でもない。チリなのであること。深く自覚しつつあるのです。やっと先人の知恵を見つけた様に思いつつ、私以外の人にも恵みを分けたいと思える様になり、会に参加する動機となっているのである。出来る丈都会人の自然保護にならぬ様に自然と付き合えたらと思う。余裕が生まれて来たら少しづつ山の幸、川の幸等に恵まれます様に。　合掌

好きな言葉　“食物連鎖”

歯車のどの一つが欠けてもバランスがくずれるから。



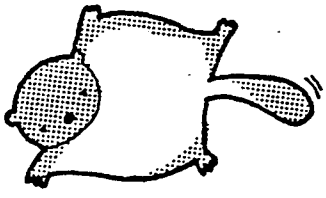
佐呂間町　須貝　加代子

暦の春は三月から。私の春はフキノトウから始まります。早ければ四月上旬でしょうか。ふっくらと優しい姿に不釣合いな程たくましく雪を分けて顔を見せる。

蕗にみずぶきがある様に、フキノトウにも水が溜まっているものがある事を御存知ですか。虫も付かず、やわらかく、シャッキリと歯ごたえも確かでこれは最高です。生なら天プラ、1～2個づつ丁寧にゆでたものは汁の実、卵とじに。又、細かくきざんでフキノトウ御飯などはいかがでしょうか。花開いたものでも充分あのホロ苦さを楽しむ事が出来ます。初夏にかけてはヨモギ・イラクサ・イズイ・ガガイモ以下多数。

どこでもそうである様に、サロマ湖に面したこの地域でも防虫対策として無造作に湿地を埋め立てたり、若いミズナラの林や雑木林が切られて畑になったりしています。ナニワズも根こそぎ姿を消してしまいました。それでも未だポピュラーな野草を楽しむ程度の自然が残っています。ベランダから目の届く範囲でアオジがヒナを育て、モズがはやにえをたて、フデリンドウがひっそりと花咲く自然があるのです。近くに湿地があり、当然の事乍らボウフラの類は実に健やかに育ち、フカカ・ブヨ・ヤブカなども発剌と生きている事を含めて、此処が好きです。知床の森や釧路湿原を想う同じ心で、熱い心で此処をあるが儘の姿で残したいと思うのですが・・・・。人間は欲張りですね。野草が一段落すると「お手伝い、あてにします」の便りに誘われ、主婦業も世帯主もほうりだして羅臼へひととび。何とまあ悪妻であることか。でも見過ごせない。野草展は心豊かになれる行事の一つですから。

今年、玄関ロビーには地味な花を飾ります。「立ち止まってください。見つめてください。そっと微笑ませてください。ほら、甘い香がするでしょう？ 私の名はカワラマツバ」機会がありましたら、どうぞお立ち寄り下さい。



クシロハナシノブ

小樽市　　鈴木　芳男

釧路湿原が、昭和６２年７月３１日全国２８番目の国立公園に指定されていらい、人と自然との交歓の場として新しい結びつきの姿を求める国立公園づくりが、地道に進められてきた。出発点はもちろん湿原の保護、生態系維持への最大の配慮である。

他に見られない特色は、この公園が水との微妙なバランスの上に成立している「湿原」の国立公園であるということであり、従って生態系保全のための、河川の動きや乾燥化などが、湿原の変化に直ちに結びつく。又周辺開発による土砂の流入や、国立公園指定後の人の立ち入りには最大の注意を必要とする。

釧路湿原国立公園管理事務所は、一昨年１０月開設後いちはやく、公園特別地域内では採取許可を要する植物５１科１５８種の指定告示。同年末にはタンチョウ生息調査に参加、昨年１月末には、細岡の民有地の伐採で伐採率を６割に抑制。ワカサギ釣りの車の達古武沼氷上乗り入れ禁止など大車輪の活躍である。更には７月公園核心部に車をなるべく立ち入らせない方法を検討して、ドサンコ(北海道和種馬)による公園探勝会をその有力手段の一とつとして実験するなど利用模索に熱心である。

この姿勢に理解を示し釧路カヌー協会は、標茶町の塘路漁協と塘路湖などでのカヌー利用を巡り「波で原始河岸が崩れないよう船外機を使用せず」という合意書を交わしている。更には「湿原はやはり、足と手で観賞してほしい。カヌーなども場所を制限すべきだ」という声もある。

だが湿原人気は、観光開発を力づけ昨年７月、細岡展望台から１キロ下がった釧網本線に、タンチョウヅルが翼を広げたところをかたどったカラマツ材を使ったログハウス“釧路湿原駅”ができ７～８月のシーズンの土・日には３００人を超すにぎわいだった。

更に“湿原効果”にあやかった土産品飲食店の新メニューなどが続々と生まれた。すでに「湿原のつる」「湿原の花」と云った１２、３種類の菓子、「湿原紀行」と名付けたびん詰めセットも。

釧路の繁華街を歩けば「湿原鍋」の看板。ＪＲ釧路駅内のコーナーでは、「釧路湿原」とプリントしたＴシャツも売っている。

市内ホテル１２社でつくる「フロント会」では、年間の宿泊客が平均１割りも増えたと云う。又旅行代理店では、全国の支店から湿原観光の照会が頻繁にあるそうだ。

釧路市湿原展望台の入館者は、５９年１月の開館以来昨年７月末までで５０万人の大台に乗った。

国立公園は釧路地方全体の知名度アップに大きく貢献していることは確かではあるが、自然保護と観光開発、本当に調和が計られるのか？

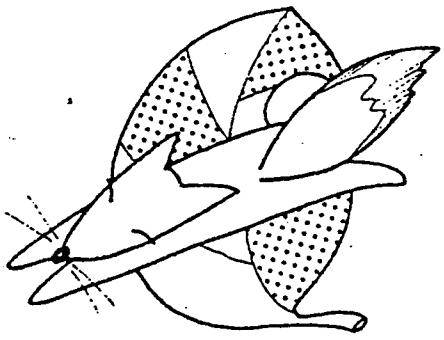
釧路湿原国立公園は「自然を大切に思う多くの人達と手を携えて創りあげたい」と願う。前田稔公園管理事務所長を一人のパーク・ボランティアとして、たとえ１年に１日でも２日でもお手伝いしたい。

（釧路湿原国立公園パーク・ボランティア養成講座受講生）

クシロハナシノブ

花冠が５つに裂け淡紫色の花、ヨシ・スゲ原で１ｍほどの茎をのばす。

釧路公立大学の校章にデザインされた。釧路湿原では以外に数は少ないと云う。



年号も平成に変わり、昭和一桁生まれの者にとっては、過ぎ去った年月が急に大事なものに思われると同時に、出生、生育地の山や川、遊びを通して自分を鍛えてくれた自然の一つ一つが、懐かしく思い出されるこの頃です。

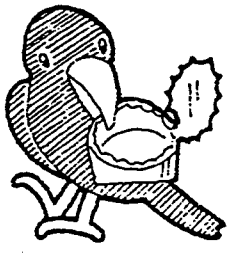
昨年七月のボランティア・レンジャーの研修会に参加したのは、今、地球規模の自然汚染や破壊の話題が、過ぎ去った年月の中での自然と自分との関わりから、どうしても切り離せなかった事。さらには自分の生業（小学校教員）から考え、自然との関わりが少なすぎる今の子ども達に、自然との接し方、自然とは何か、人と自然の正しい在り方を、できるだけ体験を通して学んでもらい、そして実践してもらうことや、自分もまだまだ自然の中に溶け込んでいきたいことから参加いたしました。

予想どおり、素晴らしい研修の実を利得できた事、また、先輩諸氏がつくられました協議会からも、励ましの言葉や、記念品をいただいた事、遅くなりましたが、厚くお礼申しあげます。

自分には、これといった得意な分野はありません。只、自然が好きなだけで、時間があれば目的もなく山野河川を放浪して歩きたいなどと思ったり、米と塩と若干の炊事用具とテントで、食料の一部を自然から自給し、自然にどっぷり浸り、飽きるまで生活してみたいと思ったりしています。その中で体験したことを、輝く瞳を持った子ども達に話してやりたいなぁと、思っています。これも、コンクリート、アスファルト、車社会、氾濫する情報、これらの中で生活している者のストレスがそうさせるのかな、と、思ったりもしています。

道東の片隅に所在しているため、また、日頃多忙な業務の関係上、協議会の皆様の行事には、いくらも御協力できないと思いますが、会報を通しての行事の盛会な様子が知らされれば、教育現場で自然についての意識を高めていきたい者にとって、またとない励みともなりますので、よろしくお願い申しあげます。

釧路市鳥取南３丁目２の８　　加藤　昭雄



「スズメバチはなぜ刺すか」（松浦誠著　北海道大学図書刊行会）から学ぶもの

山上　光一

昨年の秋に「スズメバチはなぜ刺すか」（松浦誠著　北海道大学図書刊行会）を読んだ。単なる知識の書としてでなく、自然観察をする際にも大きな示唆を与える書である。ここに一部内容を要約してみた。

1．ズズメバチは世界中で６１種、日本では１６種が知られている。

2．刺すのは♀だけ。（毒針はもともと産卵管に由来する）

3．１部の人はたった一匹のハチに手足などを刺されただけで、数分ないし数十分以内に意識がもうろしとし、全身に発疹があらわれ、呼吸困難となって重篤状態に陥る。ひどい時には死んでしまうこともある。これはハチ毒にたいするアレルギー反応によってひきおこされるショックであり、過敏症の人だけにみられる。

4．目に入っても恐ろしい・・・毒針を通じて人の身体に注入されるほかに空中に霧のようにふき出される。これが目に入ると激痛を感じ、その量が多いと失明の恐れがある。とくに生きているズズメバチを棒切れなどでつぶしたり靴の裏で踏みつけると多量の毒が放出される。（ミツバチ用の面布やたまねぎ用の網袋などを頭にかぶって作業することがある。これは大変危険といわねばならない。プラスチック製なら良い。）

5．特に凶暴なのはオオスズメバチである。

6．いったん攻撃に転じたハチはいくら振りはらっても執拗に相手の体に噛みつい刺そうとする・・・衣服の上からも突き立てる。毒性分が空中にまき散らされると仲間にたいする警報物質として作用する。

7．全国では1980～86年までの７年間におけるハチ刺されの死亡者は、1984年の73名を筆頭に年平均４３名である。北海道では1986年はスズメバチの当たり年であり、ケブカスズメバチを中心としたスズメバチが発生し、この年だけで６名の死者がでている。

8．刺されたらどうするか。

① 水で冷やす。（保冷剤が市販されている）・血管が収縮するからであろう。
② 生薬を利用する。・・・セファランチンが常用される。（医師以外の人が利用することはできない。）
③ 応急措置・・・ハチアレルギーの人がハチに刺される場合の応急措置は重症の場合、全身症状がおこるのは１０～１５分以内というはやさであるがそのあいだの本人やまわりの人の処置の迅速さが、救命の鍵をにぎっているといえるだろう。
④ その際の処置について、大滝倫子医師（1987）はつぎのように述べている。「仰向けにして、頭を低くする。刺された部位が四肢などの場合、その部位の心臓よりを縛る。これは多少でも抗原である毒体が体内に入らないようにするためである。ただし、数分ごに縛りをゆるめること。・・・刺さ

れた部位を氷か冷水で冷やす。・・・アンモニアなどを塗ってはいけない。
もし使うならタンニン酸などの蛋白凝固作用のあるものがよい」

9．刺されないためには

① 「黒」にたいしてはありありと敵意を見せ、もっとも激しい攻撃を加えて来た。
② ひらひらするもの、純毛製のもの、黒地のもの、毛皮などはハチの巣の近くでは攻撃を受けやすい。・・・オオスズメバチは巣の付近で動く黒いものにたいしては非常に敏感となる。だから5～6メートル離れていても、空中でいったんねらいをつけてから相手につぶてのごとく1直線に飛んできて、体当たりで刺すことが多い。・・・匂いもハチを刺激し攻撃対象となる。ヘアースプレー、ヘアートニック、香水などの化粧品、体臭、汗くささなどにたいしてハチは敏感に反応する。・・・また、エーテル、シンナーなどの化学薬品は、どのハチでも巣の近くで揮発させるとハチの興奮を激化させる作用がある。・・・最近蚊よけに使用されている小型の超音波発信器もハチの巣のごく近くではハチを興奮させて攻撃を受けることがある。
③ 巣の所在を知っている場合
(1) 巣を発見したら小さいうちにとりのぞく（危険と感じられたら）
(2) 巣に気がついたら側へ行かない。土中の巣の場合もその付近を歩きまわらない。
(3) 巣を刺激したり、振動を与えない。
(4) 巣の近くでは作業しない。
④ 巣の所在がわからない場合
(1) ハチの生息する環境では着衣に注意する。
(2) スプレー式殺虫剤を携行しょう。・・・家庭用のスプレー式殺虫剤（ピレスロイド系が人体に安全）が1本あると、ハチに向けてスプレーすることでその攻撃はかなり減らすことができる。
(3) ジュースや清涼飲料水の空き缶などに残った残液を餌としているので注意する。
(4) 車の運転席に入りこんだ時は・・・人を襲うことはまずないから落ち着くことだ。車をとめるか、徐行した後、できるだけ多くの窓を全開する。そのとき手などでハチをたたかないようにする。
(5) 家の中に入ったら・・・明るい方向にある窓を全開し、ハチが出ていくのをまつ．スプレー式殺虫剤をハチに向かって1～2メートルくらいからほんの数秒間スプレーすると数分後には落下して死亡する。

以上要約してみた。文章作成にあたっては ― 「スズメバチはなぜ刺すか」―松浦誠著北海道大学図書刊行会（1988年－2500円）の1 ～74P を参考にした。文章作成にあたっては原文をできるだけ載せるように努めたが一部要約してあることを了承いただきたい。さらに詳しく知りたい方は本書を是非読まれることをお薦めしたい。

昨年、環境庁主催“大雪山層雲峡・旭岳ボランティアレンジャー養成講習会”に出席した。その際、　A氏が「レンジャーは参加者全員の生命をお預かりしている。私は何時も自分が責任をとれる範囲で仕事をやらせていただいてきた。自分がお連れし、自分が責任をとれないことは、参加していただいた方に対してこてれ以上失礼なことはない。そして卑怯なことはない。」と物静かに語られた。この本の要約作業を続けるなかでその言葉が何度も私の脳裏を横切った。私も自戒しなければいけない。

手稲山研修登山

玉田　紀美子

９月２４日（日）朝８時３０分、平和の滝登山口集合。６名参加。天候も良く最良の登山日より。紅葉もまだ少しというところです。

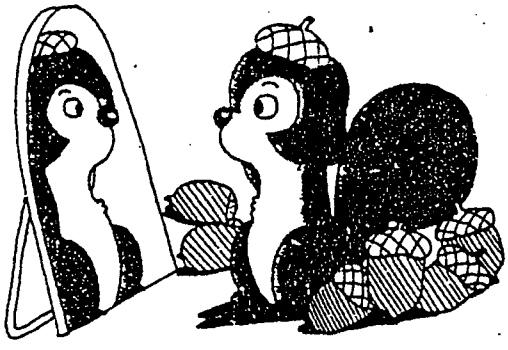
ハンの木や、ヤチダモの木々を観察しながら進む。朝鮮五味子の赤い実を発見。エキノコックスを気にしながら食べてみる。五つの味と言われていますが、私が感じた味は、甘味、酸味、胡しょう味、山しょう味、と塩味かな・・・という感じでした。

舞鶴草の赤い実、大かめの木の赤と黒の実、蔓りんどうのローズ色の実。何といっても全員が魅了されたのは、広葉吊り花の実です。その形といい、かがやいたローズ色の美しさには、皆が見とれました。頂上の南斜面に腰をおろし、定山渓の山々を見ながら昼食を取りました。河村会長さんが持参した簡易コンロでスープを作り皆にふるまってくれました。心まで温たかくなりました。会長さんは道中沢山の顔見知りがおられ、又大変健脚でもあり日頃のご活躍ぶりが手に取るように感じられました。

登山道には、みずならの大木が多くあるのに、とんぐりの実が全く見えません。去年の今頃だと沢山見えていたのにどうしたことでしょう。今日は、十五夜、ススキの穂を少しばかり取って帰りました。

（追伸）

その後、１０月中頃と１１月の初めに登ってきました。去年のこの頃は、どんぐりの実がごろごろビー玉の様にころがっていましたが、今年は一つもありませんでした。やはり、心配した通り大変不作の年なのですね。どんぐりを好物としているリスやカケスの受難の年になるでしょう。



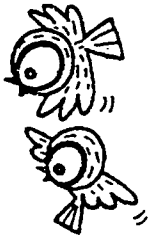
協議会への入会ご案内

入会はいつでも受付ておりますが、会則の改定により次号発行までに会費の納入がないばあいは、会の台所事情もあり会報をお届できませんのでご了承ください。

会費の納入は、会報７号に同封の振込用紙をご利用ください。

郵便振替口座
番　号　小樽　８－２１４４２
名　称　北海道ボランテイア・レンジャー協議会

お問い合わせは
〒　０６５　札幌市東区東苗穂６条１丁目 8-26
小　竹　　数　博　　電話　０１１－７８４－６２５１

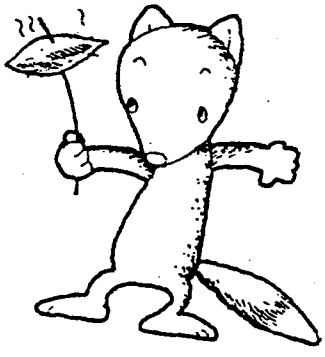


編集後記

厳寒期にはめずらしく穏やかな冬の最中、戸外の樹々は冬芽が春の訪れをじっと待つ姿を観察することができます。

さて、会報８号をお届けしたわけですが、今回は昨年の夏、標茶町茅沼で研修会を受講され、この度協議会に入会くださった方々に寄稿をお願いし、その特集号としました。お寄せ戴いた文章を拝読し、研修会受講の動機、自然への賛歌、また多様な人生の節目を綴られた珠玉の文、これらがみなその土地にあって、その人でなければ書き得えないものであり、まさに厳寒の朝日に輝くダイヤモンドダストの美しさを見る想いであり、かって私が研修受講当日期待に包まれ会場に向かった時のことが、鮮明な想いとなって蘇がえってきたのです。

私共は、自然を愛し、自然とともに生きるという素朴な願いにおいて心を一つにできる仲間であると確信いたします。

北海道ボランティア・レンジャー協議会の活動はまだ始まったばかりです。既会員もこれから入会されるかたもお互いひとつの目的に向かつて手を携え、この会を育てていただき、今後持たれるさまざまな観察会を通じ、自然を愛する多くの方々と、豊かな自然にあずかり、かつ保全に努めるよう、そのための奉仕の一端を担いつつ、行政の方々や、私どもをご指導下さっている先生方々ともども協力してこの会の活動を充実した意義あるものとするためにも、会報は会員相互の交流の場また情報源としてご活用いただきたく会員各位のご支援を心よりお願い申し上げます。

広報部長　小山　賢一郎